

名古屋女子大学

27号

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所長 洪谷 寿
SHIBUYA Hisashi

「ユーチューバーになりたい」という、子供たちの将来の夢を、ある幼稚園の卒園文集で見つけた時は驚きました。今までは、男児は野球選手やサッカー選手、女児はお花屋さんやケーキ屋さん、幼稚園の先生などが多く挙げられていましたが、幼児にまで動画サイトが身近になっていることは確かなようです。おそらく両親の、スマートフォンの動画サイトを見てそのように思ったのではないのでしょうか。広辞苑第7版には、第6版に掲載のなかった「スマホ」が、スマート・フォンの略として記載されています。文部科学省は、幼児教育から大学教育まで教育現場でICT機器を使うようにすることを明確にしていますが、今後は、携帯電話の機能をはるかに超えたスマートフォンが教育現場における情報機器の一つになることは明らかだと思われます。スマートフォンが普及して、デジタルカメラの売れ行きが落ち、生産を取りやめたメーカーもあると聞きます。いまだ広辞苑には記載のない、「ユーチューバー」、「インスタ映え」などの新語も、スマートフォンが普及してきた故の産物と言えるでしょう。

もう、予想もできない時代の変化を実感させられますが、最近、地下鉄で、多くの乗客がスマートフォンを操作している中で、通学中の小学校低学年の児童が、立ったまま本を読んでいる姿を見ました。大学生には授業の中で読書を推奨していますが、電車の中で読書をしている若者を見ることはまれです。読書をしている小学生に、純粋な学びの

姿を見る思いがすると共に、少し前の、インドの子供の遊びと玩具に関する、スダルシャン・カンナ等が行った研究を思い出しました。それは、インドの貧困層の子供たちの方が、富裕層の子供たちより創造性が高いという報告です。貧しい子供たちは電子ゲームが買えない故に身の回りのものを工夫して創り遊んでいるが、豊かな子供たちは電子ゲームなどに依存しているため、創造的な思考ができなくなっていると警告しています。そして、貧しい子供たちがコンピュータゲームを買えるようになると、又自分での創造的な工夫が生まれなくなると述べています。

日本でも子供の貧困は大きな社会問題になっていますが、豊かであれば良いという問題ではないでしょう。世の中が発展し、便利で豊かになればなるほど、その弊害に対する対立相補的な要素・問題の本質的検討が必要になると言うことができます。総合科学研究所では、この、物事の本質的研究を様々な分野で行っています。機関研究「大学における効果的な授業法の研究」では、時代の進行と調和する教育の在り方、また機関研究「創立者越原春子および女子教育に関する研究」や総合科学研究所が窓口となっている「地域貢献事業」の新たな展開として、女性の生き方の研究や女性が社会で活躍できる環境の提案や応援、機関研究「食と健康に関する研究」では、本学で開設が予定されている看護学科とも関係の深い「咀嚼の研究」、そして「地域貢献事業」として、子供たち・高齢者の方々を対象とした様々な分野のワークショップ、また学際的・学術的切り口によるプロジェクト研究を推進しています。本便りでは、これらの中間報告や研究成果の概要、総合科学研究所の活動を掲載しています。これらの内容をご確認いただき、総合科学研究所の企画にご助言・ご協力いただきますようお願い申し上げます。

平成29年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂保健センター「若返りきらきらセミナー」を終えて

瑞穂保健センター（平成30年4月より「瑞穂保健所」から「瑞穂保健センター」に名称を変更しました）では、平成29年度に名古屋女子大学と共催で「若返りきらきらセミナー」を開催いたしました。この教室は平成21年度より開催しており、高齢者の介護予防を目的として、名古屋女子大学の教員の方等が講師として実施されております。毎年大変好評な教室です。

平成29年度は、平成29年10月から平成30年2月までの6日間コースで、60歳代から80歳代の28名の方が参加されました。内容は講話だけでなく、作品制作や音楽療法、調理実習などアクティビティーを取り入れた多彩な内容となっております。

具体的には、アイロンプリントを使ったオリジナルTシャツ作成、絵手紙教室、健康に過ごすためのストレッチ&エクササイズ、口腔についてのお話と実習、懐かしい童謡の歌唱、味噌煮込みラーメン作りなど、楽しく気持ちが若返るものばかりで、期間限定のキャンパスライフを満喫されていました。絵手紙教室では「初心者も葉書に自分の思いを筆に込め、それを届ける楽しさ」という講師の一言で、楽しそうな皆さんの様子が印象的でした。『愛知の味！味噌煮込みラーメン作り』は、「楽しかった」、「愛知の味を再確認した」、など好評でした。また、『学んでみよう♪よく噛んで健康寿命をのばそう』では、「よく噛む事で人生が変わるといっても過言ではないと思った」、「人生で工夫していくことの大切さに気づいた」等々、参加をきっかけに今後の生活が豊か

瑞穂保健センター保健予防課 保健師 川端恵子

になることが期待できるような素敵な感想をいただいております。

近年高齢化が進み、高齢者を支える仕組みづくりをどうしていくかが模索されているところです。今年度から瑞穂保健センターと名称を変更し、また新たな気持ちで瑞穂区のオリジナル体操である「みずほ体操」を取り入れる予定でおります。今後も大学と保健センターの協働により、地域の皆さんの健康づくりに寄与していきたいと思っております。



オリジナルTシャツづくり



味噌煮込みラーメン作り



よく噛んで健康寿命を延ばそう



懐かしい童謡や唱歌

平成29年度
「開かれた地域貢献事業」
報告

名古屋市瑞穂児童館 平成29年度の共催事業を終えて

名古屋市瑞穂児童館 レクリエーションスタッフ 渡邊治美

名古屋女子大学と瑞穂児童館が協働事業を行うようになって10年が経ちました。

平成29年度は、乳幼児と保護者から、小学校高学年の児童までを対象にした過去最多の13講座とクリスマスイベントを開催し、沢山の方々に参加していただきました。

どの企画も、保護者の子育ての糧となり、参加児童にとって楽しいことはもちろん、児童の計り知れない創造力を引き出し、やり遂げたことへの達成感を与えて下さる素晴らしい内容の数々でした。児童館だけでは実現することのできない、専門性を活かした名古屋女子大学との協働事業だからこそ皆さんに提供できる貴重な機会であることを強く感じております。

「地域子育て支援」を担う児童館には、毎日たくさんの親子が来館されます。幼い子どもと安心して遊ぶために来館されるだけではなく、「家の中でずっと子どもと二人きりでは息が詰まってしまう」「誰かと話したいと思い、出かけてきた」など、保護者自身の不安解消やリフレッシュの場として児童館を訪れる様子も窺えます。昨今、子育てに関するたくさんの情報が溢れる時代に、保護者にとって選択肢が増える一方、自身の子育てに確信が得られず、戸惑いや不安を抱きながら、子育てに向き合っている方も多くみえます。そんな中、本事業の「子育て支援活動」では、学生の皆さんが乳幼児の月（年）齢や発達段階に応じ企画して下さった音楽あそびや、お母さんが乳児にやさしく語り掛けることにより、母親と乳児の絆をより深める方法を学ぶ講座など、親子の触れ合いを楽しみながら、コミュニケーションの大切さを学び、日々の子育てに役立つスキル

を身につけることができた喜びの声も多く伺いました。また、保育学科や児童教育学科を擁する名古屋女子大学の専門性に裏付けされた講座は、子育ての“学びの場”となっただけでなく、同じように子育てをしている保護者同士が交流して、自身の子育てを見つめ直し、改めてわが子の育ちを喜び、向かいあえる自信につながったようでした。その結果、参加されたどの保護者も笑顔で帰られる姿がとても印象的でした。

また、児童が中心となって取り組む講座も沢山企画して頂きました。毎年人気の高い調理の講座では、設備の整った大学内の調理室を使用させて頂き、年齢の近い学生さんにサポートして貰うことで、低学年児童にとっても無理なく楽しみながら参加することができました。また調理の工程だけでなく、試食やお土産のラッピング等にも学生さんの心遣いが見られ、参加児童の満足度は毎回高いものとなっています。（その証拠に、調理を伴う講座は、リピーターが多いのが特徴です！）

調理の工程を楽しむだけでなく、児童にとって必要な栄養素を知り、衛生面の大切さを学ぶことのできる大変有意義な時間だったと感じています。

どの講座も、参加した児童や保護者にとって、心に残る体験になったのは言うまでもありません。それだけでなく、児童館職員の私たちにも大変参考になり、新しい発見の場を提供して下さることに感謝申し上げると共に、今後も参加者一人ひとりの思いに応えられるようなひと時を協働して創り上げることを希望いたします。



サラサラ唾液で良い消化



お絵描きあそび



親子で運動あそび



クリスマスクッキーづくり

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～豊かな感性の獲得～

今年度は、研究主題を「豊かな感性の獲得一環境の工夫を通じて」として、園生活の中での環境の一つとしての「自然環境」に着目し取り組み始めています。

幼稚園教育要領では、「環境を通して行う教育」が基本となっています。豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりすることによって、知識としての基礎となるべきことを習得していくことができます。例年、自然環境の一つとして、各学年の発達段階に合わせて植物の栽培を行って

幼児保育研究グループ

す。今年度も、子供たちが自らの手で土を掘って苗を植え、種を蒔きました。毎日の水まきの中で、その生長に目を向け、期待と喜びをもって取り組む様子が見られます。また、昆虫の飼育では、その特性に気付き、生き物の成長にも関心を高めています。こうした自然環境を生活の中に取り入れながら、その中で気付きや感性の育ちを求めての取り組みをさらに検討していく予定です。

（文責：森岡とき子）

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究8」

～学生における効果的なアクティブラーニングの開発～

三宅元子代・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・渋谷寿・白井靖敏・杉原央樹・竹内正裕・遠山佳治・羽澄直子・服部幹雄・野内友規・山田勝洋・吉川直志
今年度から、「大学における効果的な授業法の研究8」として、学生における効果的なアクティブラーニングの開発を行います。現在までの研究では、1.情報教育、2.語学教育、3.教養教育、4.初年次教育、5.評価方法、6.学士力育成、7.主体的学修について検討してきました。それらの研究成果をふまえて、大学教育に求められている「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブラーニング）」について研究する予定です。特に、

本学の学部・学科の特性に応じたアクティブラーニングの手法を見いだすことを目的とします。

初年度は、次の3点を重点的に行います。

- ①教員を対象にアクティブラーニング型授業の実態を調査します。
- ②テキストを用いて研修を行い、研究内容の理解を深めます。
- ③学会や研修会に参加し、情報を収集します。

（文責：三宅元子）

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

佐々木基裕代・河合玲子・杉山実加・遠山佳治・豊永洵子・藤巻裕昌・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は平成28年度～30年度の3年間にわたって行われるものです。本年度は、その3年目に当たります。越原春子先生の建学の精神、教育理念を日本の女子教育史の中に位置付けていく共同研究と、それを視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究を同時並行に進めています。

共同研究においては、学校情報の整理を目的とした関連教職員へのインタビューを計画しております。これまで、本学に長く勤められた先生方への聞き取り調査を行ってきました。本年度も、更に

詳細な女子教育の歴史叙述を目指しています。

個人研究に関しては、毎回2名ほどの担当者が、自らの専門性に基づいた研究報告を行っております。旧制高等女学校から、戦後の短期大学、大学へと移行した本学の変遷を念頭に置きながら、教育学、歴史学、音楽学、体育学、社会学等のメンバーが有する専門性を活かしながら、学際的な観点から研究を進展させています。

(文責：佐々木基裕)

機関研究

「食と健康に関する研究」

駒田格知代・伊藤美穂子・大曾基宣・小椋郁夫・高橋哲也・田辺賢一・山中なつみ・山田久美子

私達の生活では“知育”“体育”に加えて“食育”が重視されるようになってきました。新学部・新学科の発足を機に、本学の主要な研究テーマの一つとして推進しようという目的で本研究会が設立されて1年が経過しました。その間、それぞれの会員が、食べること（食育）の理解を栄養面に限らず、食べる人の側から“咀嚼”という行為について新たな方向から追及していこうと、自らの専門とする教育・研究の領域で思考を重ねてきました。本年度は

それらを“食育—咀嚼の意義—(仮題)”に集約し、冊子にまとめて地域の幼・小・中学校を中心に配布することで、大学と地域の交流を深め、より発展した相互関係を樹立すると共に、本学の専門性をより高めたいと考えています。名古屋女子大学が最も得意としている教育・研究領域の一つである“食と健康”にかかわる様々な諸問題を幅広く追求し、地域貢献につなげていく方針です。

(文責：駒田格知)

プロジェクト研究

「近代日本における音楽教育の変遷をふまえた今の日本に必要な音楽・音感教育のあり方」

稲木真司代・佐々木基裕

日本の音楽教育は、主に明治維新後に始まりましたが、これは欧米における西洋音楽を取り入れる形でなされました。その後、2度の世界大戦を経て、日本の音楽教育は特殊な変化を遂げています。国際的な観点から見てとれる日本の音楽教育の特殊な点として、例えば多くの教育者やメディアまた一般の人々が、子どもたちが「絶対音感」を身につけることが理想だとして認識していることや、「ドレミファソラシド」が音名としても階名としても用いられ

ていることなどがあげられます。絶対音感は一般的に、幼児期に特別な音楽環境において訓練を受けなければ習得が難しい能力であり、音楽性という点に関して言えば、絶対音感よりも相対音感のほうが重視されるべきなのです。この研究では、そのような点から、今求められている音楽・音感教育のあり方を探っていきます。

(文責：稲木真司)

プロジェクト研究

「子どもの表現と創造性を育むアート教育の指導法の開発Ⅱ」

松田ほなみ代・伊藤理絵・河合玲子・神崎奈奈・白石朝子・山本麻美

本研究では、感性豊かな子どもを育むための教育的プログラムの開発を目指し、「子どものアート教育」という視点から、造形表現と音楽表現の垣根を越えた「表現」領域の指導法を研究しています。今年度で2年目に入り、昨年度の研究を踏まえ、今年度の研究計画を具体化しているところです。昨年度は、学生の5領域における「表現」に対する理解や、学生の感性・創造性が指導授業の

前後でどのように変化したのかを検証、分析、中間報告を行いました。その折には、これからの領域「表現」の在り方を考える研究会も開催致しました。それらを基に、年度末にワークブックを開発することが出来ました。ワークブックは、保育学科2年生に配布されています。今後、教育効果を分析し、研究を進めていきます。

(文責：松田ほなみ)

プロジェクト研究

「幼児教育の5領域を主題とする「つくる、たべる、おしゃべりする」対話型ワークショップデザインの実践的研究」

堀 祥子代・村田あゆみ・阪野朋子

本研究は、幼児教育における5領域をメディアとするコンテンツを用いたワークショップを通して、現代社会における暮らしを見つめなおし、生きる力の源泉となる知恵を共有、地域で主体的に生活を陶冶する場を形成することを目的とした実践的研究です。

今年度の終わり頃には瑞穂児童館との共催で、地域の親子中心に参加者を募り、「つくる、たべる、おしゃべりする」ワークショッ

プを計画しています。現在、研究メンバーでそれに向けて文献収集や打ち合わせを進めています。夏にはこの地方の人々の暮らしと食文化についての事例研究を行う予定です。「人間の生活における本当の豊かさとは」についての問いかけや対話方法などの検討を考えています。

(文責：堀 祥子)

プロジェクト研究

「一汁一菜の献立に関する栄養学的分析と持続可能な食生活へのアプローチ」

阪野朋子(代)・瀧日滋野

近年、家庭における調理時間は短縮傾向にあることから、料理研究家により、一汁一菜の献立で栄養バランスをとることが提案されました。しかし、一汁一菜の献立は、必要な栄養素や食材を摂取することが容易ではないとの指摘もあり、一汁一菜の実用性については詳細に検討する必要があります。本研究では、家庭での調理を担当している者を対象として、一汁一菜の献立を調理してもらい、栄

養学的分析を行います。調査から実態を把握するとともに、栄養バランスを考えた一汁一菜の献立作成の留意点を抽出する予定です。明らかにされた留意点は、多様化する生活スタイルに合わせて献立パターンを選択し、主体的に栄養バランスを考えた食生活を営む力を助長すると考えます。

(文責：阪野朋子)

開かれた地域貢献事業 平成30年度事業計画紹介

本研究所では瑞穂児童館および瑞穂保健センター（旧 瑞穂保健所）との交流事業を企画・運営しています。これらの事業での講座は、地域の皆様に毎年楽しみにして頂き、多くの方にご参加頂いています。それを反映し、今年度も学内公募では数多くの応募があり、大学内での地域貢献への意識が更に高まっています。瑞穂児童館との交流事業は、乳児から幼児、小学生までを対象に、10月から3月までの全12講座と12月のクリスマスイベント5講座を開催

します。瑞穂保健センターとの交流事業は、今年度も一般介護予防事業への支援として65歳以上の方を対象に運動・認知予防・口腔・栄養の4つのテーマに沿って「若返りきらきらセミナー」を10月から全5回で開催します。事業は家政学部、文学部、短期大学部の教員および多くの学生の有志によって、特色ある大学での研究を基にした幅広い分野の楽しい講座となっています。今年度もこれらの地域貢献事業の講座にご期待下さい。(文責：吉川直志)

大学講演会のお知らせ

演題 女性のキャリア教育と就職支援について

講師

磯野彰彦氏

昭和女子大学キャリア支援センター長兼キャリア支援部長・
同大学グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科教授

日時

平成30年9月20日(木) 10:00~12:00

場所

学校法人越原学園 記念館ホール



略歴

磯野彰彦(いその あきひろ) 1978年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。同年、毎日新聞入社。2011年新聞研究本部長を最後に選択定年退職。2011年昭和女子大学入学。キャリア支援センター副センター長、客員教授。2013年キャリア支援センター長、グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科特命教授。2017年より現職。

本年度の講演会では、本学のキャリア教育に生かすため、女性に特化したキャリア教育をテーマとして取り上げました。そこで、メディア論や政治、ジェンダー等がご専門で、昭和女子大学でキャリア支援センター長を務めていらっしゃる、磯野彰彦氏にお話を伺います。

昭和女子大学は、卒業生1,000人以上の女子大学で実就職率8年連続トップを誇っている大学です。第一線で女子大学生の就職支援に尽力されている同氏には、今まさに実践されているキャリア教育、就職支援の取り組み等をご紹介します。また、「女性」に特化したキャリア教育の方法論についてもご講演いただきます。

今年度(H29年度)運営委員

委員長

森屋 裕治
MORIYA Yuji
(短期大学部)

伊藤 充子
ITO Mitsuko
(文学部)

河合 玲子
KAWAI Reiko
(短期大学部)

羽澄 直子
HAZUMI Naoko
(文学部)

山田 久美子
YAMADA Kumiko
(家政学部)

研究所メンバー

所長

渋谷 寿
SHIBUYA Hisashi

顧問

河村 瑞江
KAWAMURA Mizue

主任

吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

教授

越原 一郎
KOSHIMURA Ichiro

職員

寺島 まり子
TERASHIMA Mariko

職員

牧野 弘実
MAKINO Hiromi

編集後記

ここに総合科学研究所だより第27号をお届けいたします。大学では教育と研究が両立してこそ、新しいものを生み出せます。本研究所でも研究の成果が教育として、そして地域貢献として波及し、また次の研究へと続いています。大学での研究と教育の広がりをご実感いただければ幸いです。ご執筆頂きました関係者の皆様には感謝申し上げます。地域貢献事業では多くの先生方にご参加頂き、さらに本年度の事業にも更に多くの先生方にご協力頂けることとなり感謝いたします。研究所の事業や研究は教育へ、そして新しい研究へとつながっています。今後とも、総合科学研究所の活動にご期待頂き、ご協力をお願いいたします。(文責：吉川直志)